

JSCR Newsletter



日本糖質学会会報

JSCR Newsletter published by

The Japanese Society of Carbohydrate Research

2022 年を振り返って

日本糖質学会 会長 石田 秀治

2022 年は糖質学会関係者にとって記念すべき年になりました。改めて述べるまでもなく、アメリカ・スタンフォード大学のキャロリン・ベルトツィ教授とデンマーク・コペンハーゲン大学のモーテン・メルダル教授のノーベル化学賞のご受賞です。直接的な受賞理由はクリック・ケミストリーの開発と応用で、糖化学に限定した受賞理由ではないですが、お二方とも、これまでに糖質・糖鎖科学研究への貢献の大きな方です。皆様とご受賞をお祝いしたいと思います。近い将来に、ノーベル医学・生理学賞でも糖鎖科学関連の受賞があればと期待しています。

一方、日本糖質学会としましては第 41 回の年会对面形式で開催できたことが大きな喜びです。一昨年誌上開催、昨年ハイブリッド開催を経て、本年、大阪大学の三善英知先生のご尽力で対面での開催を遂行して頂きました。心より御礼申し上げます。別ページにご報告をご執筆頂いていますので、ご参照頂ければと思います。

今年度の年会对面に参加して、百年目という落語に出てくる「梅檀（せんだん）と南縁草（なんえんそう）」という話を思い出しました。「梅檀は双葉より芳し」の梅檀です。昔、天竺に梅檀（せんだん）と言う立派な木があり、その下に南縁草という草が沢山茂っていた。ある人が南縁草を取ってしまうと、梅檀が枯れてしまった。後で調べると梅檀は南縁草を肥やしにして成長していた。また南縁草は梅檀の露で育っていた事が分かった。お互いに持ちつ持たれつという関係であったというお話です。学会（年会）で言えば、特別講演等が梅檀に相当し、ポスター発表が南縁草に当たるかと思えます。対面開催ならではの、学生さんや若手研究者の熱気あふれるポスター発表があって学会（年会）が活性化し、また先達による素晴らしい講演を聴講することにより、学生さんや若手研究者の成長が促されます。特別講演とポスター発表の両方があるこそこの学会（年会）だと実感しました。今後もこの両輪がうまく噛み合っていけばと思います。

最後に、糖質・糖鎖科学の未来について述べさせていただきます。2022 年で年会が 41 回目を迎え、論語で言えば「不惑」を過ぎた事になります。実は、論語の時代には「惑」という漢字ではなく「或」という漢字が使われていたそうです。「不惑」とは迷わないことを指しますが、「不或」は区切らないことを意味するそうです。今、学術会議のリードのもと、「未来の学術振興構想」の策定に向けた「学術の中長期研究戦略」の提案が進められています。本学会も、糖質・糖鎖関連ソサイエティーの一員として案の作成に参画しています。今後は、糖質・糖鎖を中心に据えながらも、関連領域と幅広い連携を進める事で、糖質・糖鎖科学の「不或」を実行していければと思います。

CONTENTS

- | | | | |
|---------------------------|-----------------|---|-------------|
| ■ 会長巻頭言 | 石田秀治◎1 | ■ 第 26 回日本糖質学会奨励賞受賞候補者募集 | |
| ■ 第 41 回日本糖質学会年会の報告 | 三善英知◎2 | | 平林淳・佐藤ちひろ◎7 |
| ■ 第 4 回日本糖質学会優秀講演賞選考結果 | 鈴木匡・佐藤ちひろ◎4 | ■ Sialoglyco 2022 : 第 12 回国際シアロ糖鎖科学会議報告 | 北島健・石田秀治◎8 |
| ■ 第 24 回ポスター賞選考結果 | 平林淳・鈴木匡・佐藤ちひろ◎5 | ■ Glyco26 トラベルグラントの応募受付 | ◎10 |
| ■ 第 42 回 日本糖質学会年会（鳥取）開催予告 | 田村純一◎6 | ■ 事務局報告(理事会・評議員会・総会)議事録 | ◎11 |
| | | ■ 理事・評議員・名誉会員・顧問・維持会員 | ◎14 |

第41回日本糖質学会年会を主催して

世話人代表 大阪大学大学院医学系研究科 三善英知

第41回日本糖質学会年会は2022年9月29日～10月1日、大阪大学コンベンションセンターと医学部保健学科講義棟で行われました。参加人数の総数が533名、発表演題総数253題という予想以上の数で、代表世話人としては3日間大きなトラブルがなく成功裡に終えたことで、ほっとしたというのが正直な気持ちです。新型コロナウイルスの第7波がいつまで続くのか懸念されましたが、年会の開催に合わせたように少し下火になりました。2年前に鹿児島島の次は久しぶりに大阪開催をという理事の方からの声を聞き、本当に開催を決めたのは1年半ぐらい前に大阪大学コンベンションセンターを予約した日のことです。あいにく日本癌学会の日程とドンピシャで重なってしまいましたが、この日程でしかコンベンションセンターを予約できず、私自身も大学院生の時から皆勤だった癌学会への参加を諦めました。癌学会に参加予定だった皆さまには、改めてお詫び申し上げます。

伝統ある糖質学会年会なので大変プレッシャーを感じましたが、世話人の深瀬先生、梶原先生から年会長が好きなように企画したらいいというアドバイスをいただき、肩の荷が下りました。2022年の3月までは医学部保健学科長を務めていましたので、学会の準備は二の次でした。研究室のスタッフは准教授の近藤純平先生だけなので彼に丸投げで仕事を頼むと、15名以上いる大学院生の指導ができなくなってしまいます。そこで大きな企画を学生時代バドミントン部の同期だった医学科の教授と後輩の大阪大学蛋白質研究所/微生物病研究所の教授に全て任せました。企業とのやり取りに関しては直接私が関与し、先方から「教授ではなく実際にわかっている人と話がしたい」というメールが来たので、「私が一番よく把握しています」と返信したのを覚えています。さて年が明けて学会をサポートしてくれたプリマツアーズとのやり取りの頻度が増え、学会登録システムと全体のスケジュールが完成しました。次の仕事はホームページの構築です。これをどこの業者にお願しようかと思っていたところ、准教授の近藤先生が自ら手を挙げてくれました。何と彼はプロも顔負けのホームページ作成能力があったのです。デザインよりも実用性、リアルタイムで必要事項を掲載できる、まさに理想的なホームページでした。

実際に学会が始まると、あっという間に時間が過ぎました。最初の会長挨拶では500名の会場の約1/3が埋まり、糖質学会の重鎮の先生のお姿を拝見しながら、「異分野融合を学会の主題テーマに挙げ、特徴的な4つのワークショップ(WS)を企画した」という年会の概要を紹介しました。まず初日のWSである令和のグライコサイエンスでは、予定時間を大きく超えた活発な討論が行われました。AMED-CREST/Prime「プロテオスタシスの理解と革新的医療の創出」に



採択された研究者によるWSと基礎医学研究のフロンティアWSでは、非常に格調の高い発表が行われ、将来のノーベル賞も夢でないという内容でした。保健学科らしい臨床検査のWS「臨床につながる糖鎖：バイオマーカーから応用へ」では、立見の聴衆が多く出ると嬉しい悲鳴も聞こえてきました。特別講演では、大阪大学の特徴を生かした金田安史先生による「基礎研究から参学連携へ、そして社会を創る」という夢のあるご講演と、忽那賢志先生による「COVID19の現状とコロナ時代の感染対策」に関するご講演は、非常に印象に残りました。男女協働セミナーでは名古屋大学の山本英子先生に「私のキャリアパスと男女共同参画」という素晴らしいご講演を賜りました。会場の床を傷つけないために、段ボールで作ったポスターパネルに不安を感じていましたが、熱いポスター討論は連日行われ、糖質研究に関わる研究者の皆様の高い志に感動しています。

全体を通じてLINEを駆使した研究室の学生のチームワークは抜群で、代表世話人である私は最初と最後の挨拶以外は何もしないでも、万事うまく運営できました。深瀬研、梶原研のスタッフと大学院生の方が会場設営、運営、後始末と全て手伝ってくださり、本当に助かりました。写真は学会終了後に撮影した集合写真で、前列の近藤准教授が一番嬉しそうに笑っているのが印象的です。また参加人数も多く黒字会計となったため、学会運営の残金を糖質学会にお返しすることもできました。研究発表内容の詳細に関しては誌面の関係で記載できませんが、ランチョンセミナーの内容がよく、お弁当が美味しかったという話をよく耳にしました。年会のサイエンスの部分は要旨集という記録に残り、懇親会や昼の弁当などは参加者の記憶に残るといった感じでしょうか。コロナ禍で人間関係が少し希薄になりがちですが、今回の学会運営を通じて三善研究室全体の団結力が強くなったように思います。強力なチームワークによって、ワールドカップの日本チームのような大きな仕事ができるものだと改めて感じました。

最後になりましたが、今回の年会開催にあたりまして当初から多大なサポートをしてくださいました糖質学会事務局の三田さまと石田会長に深謝申し上げます。そして第42回年会（鳥取）の盛会をお祈り致します。



第4回 日本糖質学会優秀講演賞選考結果

授賞選考委員 鈴木 匡

佐藤ちひろ

日本糖質学会は日本糖質学会優秀講演賞を2018年に新設いたしました。応募資格者は本会の学生会員、または32歳未満の正会員であり、発表内容、発表法、質疑応答において優れた講演を行い、今後、糖質科学の発展に寄与すると期待される方です。また本賞は研究テーマや所属研究室を審査対象とするものではなく、グループ研究の場合は発表者の貢献が大きいことが認められる場合に限っています。

日本糖質学会優秀講演賞募集は書類選考と会場での発表審査の2段階選抜方式をとっています（詳細は糖質学会のHPでご確認ください：<http://www.jscr.gr.jp/?p=contents&id=18>）。書類選考においてはライブイベントなどについても考慮され、口頭発表においては一般講演に比べ長い質疑時間が与えられます。二次審査において発表を行ったファイナリストの方々に対してはファイナリスト証を発行します。

本年度は第41回日本糖質学会（2022年9月29日～10月1日（大阪）：三善英知世話人代表のもと開催）において、一次選考を通過したファイナリスト5名が口頭発表を行いました。授賞委員会が厳正なる選考を行い、その後理事会の議を経て、下記3名の方々を受賞者と決定いたしました（敬称略）。表彰は、2023年度総会（2023年の第42回年会（鳥取）中に開催）にて行う予定です。惜しくも選に漏れた方々の発表も素晴らしいものでした。次回年会でも多数の申し込みと活発な質疑を期待しております。

石井希実（群馬大学 大学院理工学府 分子科学部門 助教）

「ENGase 活性の定量的評価に向けた蛍光標識糖鎖プローブの合成」

浦上彰吾（北海道大学 生命科学院 修士課程2年）

「MALDI-TOF MSによる迅速・簡便な細菌由来O抗原の同定法の開発」

大本敬之（名古屋大学大学院 生命農学研究科 博士課程3年）

「メダカの生存に必須な α 2,6-シアル酸担体タンパク質の同定と役割」

(50音順)

第 24 回日本糖質学会ポスター賞（今年度の選考結果について）

授賞選考委員（ポスター賞担当） 平林 淳
 鈴木 匡
 佐藤ちひろ

本賞は日本糖質学会におけるポスター発表者で 35 歳以下の会員の中から 4 件程度を選び「日本糖質学会ポスター賞」として表彰し、副賞としてシアル酸研究会からの賞金を贈呈するものです（詳細は、糖質学会ポスター賞規程をご覧ください；<http://www.jscr.gr.jp/?p=contents&id=18>）。本年度は第 41 回日本糖質学会（2022 年 9 月 29 日～10 月 1 日、大阪において三善英知代表世話人のもと開催）のポスターセッションの演題の中から、予め発表申し込み時点で申請のあった 42 題（全発表件数 165 題）を対象に、発表要旨、ポスターの出来栄、発表内容および質疑応答などの諸点を踏まえ、選考委員（評議員全員が資格を保持）による投票を行い、授賞選考委員が事務局員立ち会いのもと厳正に開票・集計を行いました。その結果、今年は下記 4 名の方々を受賞者と決定いたしました（敬称略）。表彰は、2023 年度総会（2023 年の第 42 回年会（鳥取）中に開催）にて行う予定です。惜しくも選に漏れた方々の発表も素晴らしいものでした。次回年会でも会員の皆様多数の申し込みをお願いいたします。最後に、3 日間にわたり選考にあたって下さった選考委員の方々に改めて御礼申し上げます。

【生物系】

川出 遥加（岐阜大学大学院 自然科学技術研究科）
 「糖転移酵素 GnT-III の腎臓における役割の解明」

森 祥子（公益財団法人 サントリー生命科学財団）
 「膜タンパク質膜挿入に関わる糖脂質 MPIase と基質タンパク質の相互作用解析」

【化学系】

龍岡 博亮（北陸先端科学技術大学院大学 マテリアルサイエンス系）
 「溶液 NMR 法を用いた糖-水及び水-水間相互作用の解析」

三木 太陽（九州大学大学院 理学府）
 「液体クロマトグラフィー/キャピラリー電気泳動二次元糖鎖分析法の開発」

(50 音順)

第42回 日本糖質学会年会（鳥取）開催予告

世話人代表 鳥取大学 田村純一

第42回日本糖質学会年会は、2023年9月7日～9日にとりぎん文化会館（鳥取県民文化会館）で開催することといたしました。コロナ禍は3年近く経過した今も終息の様子が見えず、2023年の年会開催に与える影響は予断を許しません。振り返りますと、2020年春に新型コロナウイルスが猛威を振るい始め、同年秋の39回年会は、誌上開催という異例の措置となりました。翌2021年の鹿児島年会は、コロナウイルス流行の波に気を揉みながら、ハイブリッド対応という、これまでにない形式での開催となりました。そして2022年の大阪年会は、コロナ禍の終息が見えない中で完全対面となりました。

私たちは試行錯誤しながら、この数年間に新型コロナウイルスとの向き合い方を考えてまいりました。オンラインでの会議や授業などは今まで考えたこともなかった手段ですが、わずかの間に多くの方が体得し、今では日常茶飯事となりました。オンライン形式は旅費も時間もかからない長所を持つ反面、十分に意思疎通できないことにも気づきました。このような経験を踏まえ、鳥取年会の持つ意義や機能を再考し、対面形式で開催することと世話人会で判断いたしました。年会は参加者の出会いの場であり、発表の臨場感や若い方にはかけがえのない経験と自信につながるはずですし、対面でのフロア活動は欠かせません。

このような状況を背景に、以下の素案をまとめました。会期は3日間とし、会員の皆様の発表機会を十分に確保し、口頭発表（三会場）、ポスター発表と、奨励賞受賞講演、優秀講演賞第2次審査、およびダイバーシティ推進講演を実施します。加えてレジェンド講演を復活させる予定です。例年通り、関連の企業様には展示やランチョンセミナーを依頼し、懇親会やエクスカージョンも復活させ、相互のコミュニケーションの場を最大限に提供できればと考えております。鳥取での年会が皆様の研究活動のご発展の一助となれば幸いです。山陰・中国地方での初めての開催となります第42回日本糖質学会年会（鳥取）をお楽しみいただけるよう、世話人会の総力をあげて準備を進めてまいります。また、年会開催前日まで同じ会場で大会を開催される、日本キチン・キトサン学会との市民開放型共同シンポジウムを9月6日夕刻に開催することといたしました。あわせてご参加ください。なお、感染症の流行状況によってはオンライン開催への変更の可能性があります。年會の最新情報は、学会HPの年会専用ページに掲載予定です。

会期 2023年9月7日（木）～9日（土）
会場 とりぎん文化会館（鳥取県民文化会館）
〒680-0017 鳥取市尚徳町 101-5

参加・発表申込み: 申込方法、発表方法の詳細は2023年4月中に学会HPの年会専用ページに掲載予定です。

発表申込み期間（予定） 2023年5月1日～6月30日

主要題目

糖質の化学、糖質の生化学、糖質の構造生物学、糖質の化学生物学、糖質の材料科学、糖質の反応/計算科学、糖鎖研究の医療・産業応用、糖鎖研究とバイオインフォマティクス。

発表採択の通知: 発表受付終了後、1ヶ月程度で演者にE-mailで通知。

参加登録料

<>内は2023年8月1日以降申込みの金額。
日本糖質学会正会員：7,000円<9,000円>、名誉会員：無料、永年会員：3,500円<4,500円>、日本糖質学会学生会員：2,000円<4,000円>、一般：9,000円<11,000円>、一般学生：3,500円<4,000円>
共催・協賛・後援の学会の規定により、共催・協賛・後援の学会の学会員は、日本糖質学会員と同額の参加登録料で参加できます。

年會の構成 レジェンド講演（特別講演）、日本糖質学会奨励賞受賞講演、ダイバーシティ推進講演、優秀講演賞第2次審査、一般発表、ランチョンセミナー、企業展示等。

一般発表には以下のカテゴリーがあります。
(1) 口頭発表A（20-25分 PCによる発表） 1研究室あたり1件。
(2) 口頭発表B（12-15分 PCによる発表） 研究室あたりの発表件数に制限なし。
(3) ポスター発表 研究室あたりの発表件数に制限なし。
一般発表の発表形式に対し、採否は世話人会にご一任ください。

託児室 会期中、会館内に託児施設を開設予定（詳細はHPでお知らせします）。

第 26 回日本糖質学会奨励賞 受賞候補者募集

授賞選考委員長 平林 淳
授賞選考委員 佐藤ちひろ

第 26 回日本糖質学会奨励賞受賞候補者の選考を開始します。

受賞候補者の資格：糖質科学の分野で優れた研究成果を挙げた満 40 歳以下（2023 年 7 月 1 日現在）または学位取得後 10 年以内の研究者で、2021 年 7 月 1 日以前から継続して本会会員であること。ただし、出産、育児、介護のようなライフイベントを考慮する。

日本糖質学会奨励賞募集の方法：以下に示す 2 段階で行われます。

1. 本会会員による候補者の推薦

会員は、自薦、他薦を問わず候補者 1 名を推薦できます。氏名、所属機関・研究室名と所在地、TEL/FAX、メールアドレス、A4 用紙 1/2 程度の業績の説明文、代表的な発表論文 2 ないし 3 報（タイトル、氏名、雑誌名、掲載年）を A4 判に記し、jscr.office@gmail.com までメールでお送り下さい（事務局からの受理通知を確認してください）。

締切：2023 年 2 月 6 日（月）（必着）

2. 授賞選考委員会による候補者の選出

理事会にて選出した委員による授賞選考委員会が、会員からの被推薦者中から原則として 10 名以内の候補者を選び、候補者本人に下記応募書類（1～4）の事務局への提出を依頼します。

応募書類（候補者本人から提出）：

- 1) 所定の様式の応募書類（本会事務局より候補者本人に送付）
- 2) 研究概要の紹介本文（図表を含めて A4 用紙 3 枚以内厳守）
- 3) 関連論文リスト A4 用紙に著者（本人に下線）、論文題目、誌名、巻、ページ（初めと終わり）、掲載年を記載
- 4) 主な論文 3 編以内の別刷りもしくはその写しを各 1 部

選考と発表の方法：選考は授賞選考委員会にて行い、受賞者は理事会にて決定後に JSCR ニュースレター誌上に発表し、表彰は総会（第 42 回日本糖質学会年会（鳥取）；2023 年 9 月 7 日～9 日）にて行う予定です。

提出先：

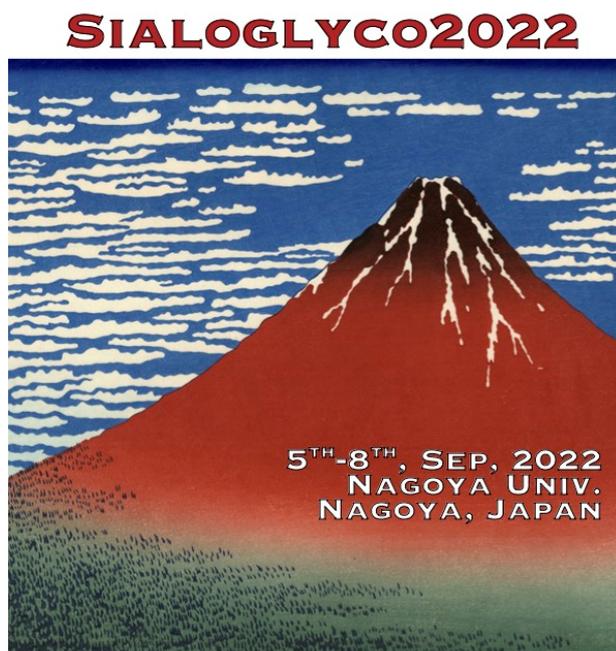
日本糖質学会事務局

問合せ：e-mail：jscr.office@gmail.com

Sialoglyco 2022 : 第12回国際シアロ糖鎖科学会議

オーガナイザー 北島健 (名古屋大学) 石田秀治 (岐阜大学)

Sialoglyco 2022 は、糖鎖の代表的機能分子「シアル酸」に焦点を絞るユニークな会議で、通常2年に一度開催されますが、COVID-19 パンデミック流行のために、2020年から2年間延期されて2022年の開催となりました。会議は9月5日から8日までの4日間、名古屋大学豊田講堂およびシンポジオンにおいて、講演およびポスター発表が行われました。本会議は日本における COVID-19 流行の第7波が冷めやらぬ時期であったため、対面とオンラインのハイブリッド形式で行いました。参加者は230名(対面181名; オンライン49名)で、80%が対面参加となり、通常を上回る盛会となりました。そのうち外国人参加者が109名(対面72名; オンライン37名)で、予想を越える大勢の海外参加者数となりました。プレナリー講演3演題、招待講演が35演題、一般口頭発表が23演題、ポスター発表が61演題でした。シアル酸はウイルスからヒトに至る広範な生物に存在して、生命の維持、個体発生、細胞間認識に関わっており、本会議の話題もシアル酸の生物学、医学、化学の研究領域が中心となりました。「感染」との関連では、ウイルスの新たな感染機構、感染細菌と血小板相互作用におけるシアル酸の重要性等が報告されました。「免疫」関連では、シアル酸結合タンパク質シグレック群について、そのリガンドとの相互作用によって免疫抑制される分子機構に関する新しいデータが多数報告されました。「がんや代謝病」との関連では、炎症やがん増殖におけるガングリオシドの重要性のほか、ガングリオシド標的抗体によるがん幹細胞破壊効果やがん免疫治療薬としての成功例が報告されました。「神経」との関連では、遺伝的および環境要因によるポリシアル酸転移酵素の不全ががんや精神疾患、神経変性疾患に関わるという新しい概念が提唱されました。「シアル酸の多様性」については、アセチル化シアル酸および硫酸化シアル酸の生合成経路の発見という歴史的な報告がなされました。「進化遺伝学と情報学」の関連では、現代人類における地球規模のポリシアル酸転移酵素遺伝子の適応進化、脊椎動物シアル酸転移酵素の分子進化に関する興味深い報告がなされました。「情報科学との融合」では、シアル酸関連の構造と機能の情報統合、シアル酸のバイオインフォマティクスのツ



◆ ORGANIZERS
KEN KITAJIMA (NAGOYA UNIVERSITY)
HIDEHARU ISHIDA (GIFU UNIVERSITY)

◆ SIALOGLYCO2022 OFFICE
CHIHIRO SATO (NAGOYA UNIVERSITY)
BIOSCIENCE AND BIOTECHNOLOGY CENTER
NAGOYA UNIV., CHIKUSA, NAGOYA 464-8601, JAPAN
TEL: +81-52-789-4297, FAX: +81-52-789-5228
E-MAIL: sialogly@agr.nagoya-u.ac.jp
◆ HP: <https://www.agr.nagoya-u.ac.jp/~sialogly/>

ル開拓研究の成果が報告されました。「化学と新技術」では、インフルエンザウイルスの診断やプローブとなるシアリダーゼの高感度検出法など、画期的技術が紹介されました。また、「化学合成」においても、シアリダーゼ種特異的な阻害剤の開発、細菌シューダミン酸の化学生物学的プローブの開発など難同定糖鎖への化学の挑戦が紹介されました。とくに、シアロ糖鎖科学研究におけるトップランナーによるプレナリー講演では、Ajit Varki 博士による「脊椎動物シアロ糖鎖認識タンパク質の発見におけるセレンディピティ」、David Crich 博士による「シアル酸およびシアリル化供与体の化学の最近の進展」、James C. Paulson 博士による「望まぬ免疫反応を抑制するシグレックの探究」という講演がなされ、各領域のシアル酸研究の過去から現在の成果、そして未来への夢が熱く語られました。また、今回初めて将来を担う若手研究者(学生および博士研究員)による特別セッションを設け、優秀者には表彰を行いました。また、前回から今回の会議までに他界された山川民夫博士、Roland Schauer 博士、Frederic A. Troy II 博士の追悼記念講演も開催し、シアル酸研究の草分

け研究者の功績を讃え、感謝と哀悼の意を捧げました。

本年会は数多くの団体から共催、後援、協賛をいただきました。また種々の財団、団体、企業からは助成、寄付、展示、広告を通じてご支援いただきました。とくに日本糖質学会には、共催に加えてご支援も賜りました。ここに深く感謝いたします。最後

になりますが、組織委員の皆様、お手伝いの学生の皆様のご協力に感謝いたします。また、事務局の佐藤ちひろ博士とその下で活躍くださった羽根正弥博士、呉迪博士などスタッフの皆様の尽力なくして、今回のハイブリッド会議は成立しませんでした。心より感謝申し上げます。



26th International Symposium on Glycoconjugates のトラベルグラントの応募受付

2010年に日本で開催された第25回 International Carbohydrate Symposium (ICS2010)を記念し、設立された基金の運用が、2012年より開始されました。その趣旨に基づき、下記の要領で26th International Symposium on Glycoconjugates のトラベルグラントの応募を受け付けます。

名称：ICS2010 記念糖質科学基金

趣旨：本基金は我が国における糖質科学分野の国際化に資する目的に使用する。

用途：若手研究者の国際糖質シンポジウムおよび国際複合糖質シンポジウムにおける旅費の援助を行う。

学会名：26th International Symposium on Glycoconjugates (Glyco26、

Taiwan、<https://glyco26.org> 注：このURLをクリックするとGlyco25に誘導される場合があります、その場合は直接ブラウザに<https://glyco26.org>と入力ください)

応募資格：日本糖質学会の会員であり、国内の研究機関に所属し、大学院生として在学中、あるいは博士号取得後8年以内程度もしくはそれと同等の研究歴を持ち、Glyco26において口頭発表（招待講演を除く）を行う方。ただし、応募多数の場合は、大学院生及び若手のポスドクを優先的に考慮する。本基金以外からの助成を受ける方は対象外と致します（応募中で採否未定の方はその由記載ください）。

件数：2件程度

助成額：1件あたり20万円（実費）を上限とする。

必要書類：（1）Glyco26における発表の要旨、（2）口頭発表採択を証明するもの、（3）履歴書、（4）業績リスト、（5）指導教員もしくはそれに準ずる方の推薦書（A4で1枚程度）、（6）旅費見積もり書。以上をメール添付にて日本糖質学会事務局（jscr.office@gmail.com）に送付。

*可能な限り、上記6点を一つのPDFファイルにしてお送りください。

応募締め切り：2023年7月31日（月）（ただし、アブストラクト採択通知状況によって延長されることがあります）

その他：Grantの受領者には、糖質学会ニュースレターに学会報告を書いていただきます。

以上、多数のご応募をお待ちしています。

令和 4 年度役員(任期 2022. 7. 1~2023. 6. 30)

理事 安藤 弘宗
 石田 秀治
 梶原 康宏
 加藤 晃一
 蟹江 治
 北島 健
 木下 聖子
 佐藤 ちひろ
 鈴木 匡
 平林 淳
 藤本ゆかり
 本家 孝一
 監事 門松 健治
 深瀬 浩一

加藤 啓子 京都産業大学生命科学部
 加藤 晃一 自然科学研究機構生命創成探究センター
 門松 健治 名古屋大学大学院医学系研究科
 金川 基 愛媛大学大学院医学系研究科
 金森 審子 東海大学工学部
 蟹江 治 東海大学工学部
 鎌田 佳宏 大阪大学大学院医学系研究科
 亀井加恵子 京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科
 亀山 昭彦 産業技術総合研究所創薬基盤研究部門
 川崎 ナナ 横浜市立大学大学院生命医科学研究科
 川島 博人 千葉大学大学院薬学研究科
 北岡 本光 新潟大学農学部
 北川 裕之 神戸薬科大学薬学部
 北島 健 名古屋大学生物機能開発利用研究センター
 北爪しのぶ 福島県立医科大学保健科学部
 木塚 康彦 岐阜大学糖鎖生命コア研究所
 木下 聖子 創価大学理工学部
 木村 吉伸 岡山大学大学院環境生命科学研究科
 顧 建国 東北医科薬科大学分子生体膜研究所
 神田 大輔 九州大学生体防御医学研究所
 小島 直也 東海大学工学部
 佐藤あやの 岡山大学工学部
 佐藤 武史 長岡技術科学大学生物系
 佐藤ちひろ 名古屋大学生物機能開発利用研究センター
 佐藤 智典 慶應義塾大学理工学部
 篠原 康郎 金城学院大学薬学部
 島本 啓子 公益財団法人サントリー生命科学財団
 清水 史郎 慶應義塾大学理工学部応用化学科
 清水 弘樹 産業技術総合研究所細胞分子工学研究部門
 須貝 威 慶應義塾大学薬学部
 鈴木 匡 理化学研究所開拓研究本部
 高橋 素子 札幌医科大学医学部
 竹内 英之 静岡県立大学薬学部・大学院薬学研究院
 竹川 薫 九州大学大学院農学研究院
 武田 陽一 立命館大学生命科学部
 竹松 弘 藤田医科大学医療科学部
 舘野 浩章 産業技術総合研究所糖鎖医工学研究センター
 田中 克典 理化学研究所開拓研究本部
 田中 浩士 東京工業大学物質理工学院
 田村 純一 鳥取大学農学部
 千葉 靖典 産業技術総合研究所生命工学領域研究戦略部
 梶谷内 晶 創価大学理工学研究科
 戸嶋 一敦 慶應義塾大学理工学部
 戸谷希一郎 成蹊大学理工学部
 豊田 英尚 立命館大学薬学部
 豊田 雅士 東京都健康長寿医療センター研究所
 中川 優 名古屋大学糖鎖生命コア研究所

評議員 (任期 2022. 7. 1~2023. 6. 30)

相川 京子 お茶の水女子大学基幹研究院自然科学系
 赤井 昭二 女子栄養大学応用有機化学研究室
 芦田 久 近畿大学生物理工学部
 天野 純子 (公財)野口研究所糖鎖生物学研究室
 荒田洋一郎 帝京大学薬学部
 安藤 弘宗 岐阜大学糖鎖生命コア研究所
 池田 義孝 佐賀大学医学部
 池原 譲 千葉大学大学院医学研究院・腫瘍病理学
 石田 秀治 岐阜大学応用生物科学部・糖鎖生命コア研究所
 石水 毅 立命館大学生命科学部
 和泉 雅之 高知大学教育研究部
 板野 直樹 京都産業大学生命科学部
 一柳 剛 鳥取大学農学部
 伊藤 孝司 徳島大学大学院医歯薬学研究部
 糸乗 前 滋賀大学教育学部
 井原 義人 和歌山県立医科大学医学部
 上村 和秀 中部大学生命健康科学部
 大海 雄介 中部大学生命健康科学部
 大谷 克城 酪農学園大学農食環境学群
 大坪 和明 熊本大学大学院生命科学研究部
 大橋 貴生 摂南大学理工学部生命科学科
 岡 昌吾 京都大学大学院医学研究科
 岡島 徹也 名古屋大学糖鎖生命コア研究所・医学系研究科
 越智 里香 高知大学教育研究部
 柿崎 育子 弘前大学大学院医学研究科
 笠原 浩二 東京都医学総合研究所
 梶原 康宏 大阪大学大学院理学研究科
 梶本 哲也 立命館大学総合科学技術研究機構
 片山 高嶺 京都大学大学院生命科学研究科
 加藤 敦 富山大学附属病院薬剤部

木塚 康彦 岐阜大学糖鎖生命コア研究所
 木下 聖子 創価大学理工学部
 木村 吉伸 岡山大学大学院環境生命科学研究科
 顧 建国 東北医科薬科大学分子生体膜研究所
 神田 大輔 九州大学生体防御医学研究所
 小島 直也 東海大学工学部
 佐藤あやの 岡山大学工学部
 佐藤 武史 長岡技術科学大学生物系
 佐藤ちひろ 名古屋大学生物機能開発利用研究センター
 佐藤 智典 慶應義塾大学理工学部
 篠原 康郎 金城学院大学薬学部
 島本 啓子 公益財団法人サントリー生命科学財団
 清水 史郎 慶應義塾大学理工学部応用化学科
 清水 弘樹 産業技術総合研究所細胞分子工学研究部門
 須貝 威 慶應義塾大学薬学部
 鈴木 匡 理化学研究所開拓研究本部
 高橋 素子 札幌医科大学医学部
 竹内 英之 静岡県立大学薬学部・大学院薬学研究院
 竹川 薫 九州大学大学院農学研究院
 武田 陽一 立命館大学生命科学部
 竹松 弘 藤田医科大学医療科学部
 舘野 浩章 産業技術総合研究所糖鎖医工学研究センター
 田中 克典 理化学研究所開拓研究本部
 田中 浩士 東京工業大学物質理工学院
 田村 純一 鳥取大学農学部
 千葉 靖典 産業技術総合研究所生命工学領域研究戦略部
 梶谷内 晶 創価大学理工学研究科
 戸嶋 一敦 慶應義塾大学理工学部
 戸谷希一郎 成蹊大学理工学部
 豊田 英尚 立命館大学薬学部
 豊田 雅士 東京都健康長寿医療センター研究所
 中川 優 名古屋大学糖鎖生命コア研究所

中北 慎一 香川大学総合生命科学研究センター
 中野 博文 愛知教育大学自然科学系化学
 中の三弥子 広島大学大学院統合生命科学研究科
 中山 淳 信州大学医学部
 長東 俊治 新潟大学理学部
 西河 淳 東京農工大学大学院農学研究科
 西島 謙一 名古屋大学生命農学研究科
 西田 芳弘 千葉大学大学院園芸研究科・応用生命化学領域
 西村紳一郎 北海道大学大学院先端生命科学科
 野上 敏材 鳥取大学大学院工学研究科
 羽田 紀康 東京理科大学薬学部
 花島 慎弥 大阪大学大学院理学研究科
 濱村 和紀 愛知学院大学歯学部
 原田陽一郎 大阪国際がんセンター研究所
 東 伸昭 星薬科大学薬学部
 比能 洋 北海道大学大学院先端生命科学研究科
 平井 剛 九州大学大学院薬学研究科
 平林 淳 名古屋大学糖鎖生命コア研究所
 深瀬 浩一 大阪大学大学院理学研究科
 藤田 盛久 岐阜大学糖鎖生命コア研究所
 伏信 進矢 東京大学大学院農学生命科学研究科
 藤本ゆかり 慶應義塾大学理工学部
 藤山 和仁 大阪大学生物工学国際交流センター
 古川 圭子 中部大学生命健康科学部
 古川 潤一 北海道大学大学院医学研究科
 北條 裕信 大阪大学蛋白質研究所
 保坂 善真 鳥取大学農学部
 細野 雅祐 東北医科薬科大学分子生体膜研究所
 本家 孝一 高知大学医学部
 松尾 一郎 群馬大学大学院理工学府
 松岡 浩司 埼玉大学大学院理工学研究科
 松野 健治 大阪大学大学院理学研究科
 眞鍋 史乃 星薬科大学薬学部
 萬谷 博 東京都健康長寿医療センター研究所
 三浦 佳子 九州大学大学院工学研究科
 水野 真盛 (公財)野口研究所糖鎖有機化学研究室
 三苫 純也 九州保健福祉大学生命医科学部
 宮西 伸光 東洋大学食環境科学部
 三善 英知 大阪大学大学院医学系研究科
 門出 健次 北海道大学大学院先端生命科学研究科
 矢部 富雄 岐阜大学応用生物科学部
 山口 拓実 北陸先端科学技術大学院大学
 山口 真範 和歌山大学教育学部
 山口 芳樹 東北医科薬科大学分子生体膜研究所
 山地 俊之 国立感染症研究所細胞化学部
 山田 一作 (公財)野口研究所
 山田 修平 名城大学薬学部・病態生化学研究室

湯浅 英哉 東京工業大学大学院生命理工学研究科
 横山 三紀 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科
 渡辺 秀人 愛知医科大学分子医科学研究科

名誉会員

池中 徳治	石戸 良治	伊東 信
伊藤 幸成	稲津 敏行	遠藤 玉夫
小川 智也	小川 温子	笠井 献一
川崎 敏祐	木曾 真	木下 タロウ
木全 弘治	楠本 正一	木幡 陽
鈴木 明身	鈴木 邦彦	鈴木 茂生
鈴木 康夫	隅田 泰生	谷口 直之
成松 久	西原 祥子	橋本 弘信
長谷 純宏	古川 鋼一	村松 喬
山形 達也	山本 憲二	

顧問

一島 英治

維持会員

(一財) 杉山産業化学研究所
 (株) スディックスバイオテック
 住友ベークライト (株)
 生化学工業 (株)
 DSP 五協フード&ケミカル (株)
 東京化成工業 (株)
 長良サイエンス (株)
 (公財) 野口研究所
 (株) 伏見製薬所
 松谷化学工業 (株)
 (株) ヤクルト

JSCR Newsletter (日本糖質学会会報) Vol. 26, No. 2

2023年1月25日 発行

編集兼発行 日本糖質学会

会長 石田 秀治

〒103-0014 中央区日本橋蛸殻町1-38-12

油商会館3F

TEL: 03-5642-3700

FAX: 03-5642-3714

JSCR Newsletter 編集委員会

本家 孝一

蟹江 治